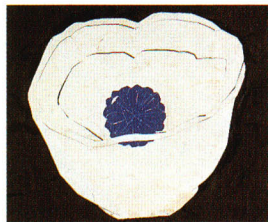




▲智恵子の生家

明治19年(1886)、地方随一といわれた大きな造り酒屋の長女として智恵子は安達町に生まれました。高村光太郎の詩集「智恵子抄」に詩われた智恵子は、光太郎との純愛に

ここは智恵子の生まれたふるさと、ほんとの空の原点がここにありますが



▲智恵子の紙絵



▲智恵子の紙絵



▲雑誌・青踏

生きた女性として、今でも多くの人びとの共感を得ています。一方で、日本ではじめてのグラフィックデザイナーという一面も持つており、数多くの素晴らしい作品を残しています。光太郎との愛、芸術にかける情熱。明治から昭和という変わり行く時代の中であって、智恵子は激しくも純粹に自分を貫いた女性でした。  
**智** 恵子が愛し、心の拠り所としたのが「ふるさと・安達」です。7人の弟妹とともに何一つ不自由のない少女時代を過ごしています。地元の油井小学校に通い、図工をはじめ学問にずば抜けて優れていました。15歳で福島高等学校に入学、そして17歳で単身上京し日本女子大学に入学します。聡明な智恵子は、女学生時代から静かな物腰の中に芯の強さを持ち、やがて自らの可能性を拓きはじめます。



▲智恵子の油絵「静物」

**当** 時の女性としては珍しい油絵の作品や雑誌「青踏」の表紙デザイン、さらに智恵子が晩年、病に冒されながらも製作した紙絵など、高い造形性を持ち、自由で豊かでやさしく、時にユーモラスでさえある作品を数多く遺しています。また、智恵子が遺した散文や詩などの書簡は、絵画とは違った智恵子の内面の心情や苦悩をも照らし出しています。  
**智** 恵子の生家は町が復元し、智恵子が暮らしていた当時の佇まいを呈しています。旧国道沿いに格子をめぐらせた二階建ての生家は、かつて造り酒屋が新酒の醸成を伝えたという杉玉が下げられ、今にも威勢のよい商いの声が聞こえてきそうです。